

釣れ釣れなるままに

2000年思い出の釣行記 PART. 2

漁人恋唄

鹿島釣狂



釣遊会第2回大会

☆開催日 平成12年5月14日

☆開催場所 寿都漁港～千早漁港

☆入釣場所 軽臼大平盤

☆潮 満潮 00:32 15cm

干潮 06:58 5cm

満潮 13:34 17cm

☆釣 果 アブラコ 357 mm 3

ホッケ 375 mm 12

クロガシラ 255 mm 2

重量 226 0g

☆成績 合計 958 点

成績 8 位

累計点 16点

新しいリュックの使い心地は

私が事務局を受け持っている団体の絵会が今週中に3つ終わった。シャンシャンとは言え、どれも責任が重く総会前にはその資料作りや総会後の懇親会の準備で慌ただしかった。出発の前日も遅くまで会議があり、当日も週休日とはいえ朝からその準備に追われ、帰りも遅いため結局女房にイカゴロを購入させ、車庫の中で溶かしてもらった羽目になった。午後3時から始まった懇親会でもウーロン茶だけを啜って早々に撤退した。自宅に戻りイカゴロを見ると5月というのにまだ溶け切らないでシャーベット状ではあったが、釣り場につくころには程よく仕上がっているだろう。

新聞の釣り情報の記事の中に寿都方面のカレイがホクテの耳の餅で上がっているとあった。自宅に戻る途中、スーパーに立ち寄り、殻付きホタテを購入する。エサづくりはそのホタテの貝柱を山葵醤油につけて頬張りながら行った。カレイになった気分でもホタテの耳の部分も食してみたがこれが何とも言えず旨い。ヌルツとした感触が舌に絡み付き、これなら寿都のカレイもイチコロであるのが頷ける。

リールについてのバックラッシュ防止用のゴムが腐っていた。まだ、購入したてなのだがなぜだろう。道糸専用の特殊フッ素樹脂保護剤をスプレーしたのがいけなかったのだろうか。釣り具店に問い合わせるとゴムの部品は取り寄せる事ができない代物であると言う。工場に修理に出すとなると3週間ぐらいはかかると言い、もちろん大会に間に合うものではない。しかもゴムの取り替えだけでウン千円となると考え込んでしまう。

前回の大会時に底が抜けたリュックは、新しいものを購入した。釣り会に参加している御仁がよく使用しているテント布製の黄緑色のリュックは製作者が病氣らしく入荷がないということで、ズック製のものとなった。これは、2段に仕切られておらずエサの取り出

し等で少々不便だが、バツカンも仕掛けもスパイクもキャップライトも道具類もなにもかもがすっぽりと入ってしまう大きさのものでそれはそれで不精な私には都合がよい。バツカンとは別に道具類を一まとめにして入れる大きな布袋を女房に縫ってもらった。これでバツカンからのエサの出し入れの不自由さは若干解消された。

入釣場所の心配がなく

1週間ほど長雨続き、その日の天気予報も雨。明日は少し回復する予報であるが低気圧が抜けた後も次の低気圧の接近を告げており、出発時にも雨が降り注いでいた。しかし、寿都に近づくとつれ雨が上がり、頻りに動いていたフロントガラスのワイパーが動いていない。

寿都漁港で身支度を整える。今回は5月というのに毛糸のモモヒキをはいた。これは女房の母親に編んでいただいたものだが編み込みがしっかりしており履き心地がよい。さらにセーターの上にスキー用のヤッケを着込んだ。多少の暑さは我慢できるものだが、寒さには堪えることができない。歳をとるにつれて年々着込む量が増えてくる。体が冷えて手が凍えてしまっただけではエサづけもままならない。釣遊会の仲間の中にはズボンの裾を捲り上げると素足の御仁もいる。彼はいつも忙しい釣りをしており、汗の始末の方こそ大変で、寒くなる暇など無いと言う。

島氏、清田氏が漁港で降りて暗い中を出て行った。港の中でアカハラや黒がしらの大物を狙うらしい。赤灯台で嵐氏、西川氏が降り立つ。5月の釣遊会の大会ではここから優勝者を出すことが多い。それぞれが各釣り場に散って行った。

私は第1回大会の折りに前野氏にご同行を願っていたので、今日は前野氏に心変わりがなければ入釣場所で悩むことがない。唯一、前野氏から軽臼乎盤の状況を聞き取るだけである。

オオナゴ漁の火の中で

海岸線には白い霧が立ち込め、漆黒の夜空を見上げると僅かに傾いた上弦の月が青白く光っている。弁慶岬を交わすと、オオナゴ漁の漁火が海面を照らしオレンジ色に染まった波が海岸へと打ち寄せられている。

小柳ルミ子が唄った「漁火恋歌」の一節がフッと口をついて出た。

♪「ああ～、沖で揺れて～るよ～、
ああ～、あ～の漁火は～。
好き～な貴方が、好き～な貴方が～、
烏賊釣る～～～小～船～～～よ～～」

「瀬戸の花嫁」でデビューしたころの愛くるしいルミ子がこの唄を出したころは、女性としても絶頂期であったような気がする。大澄賢也との離婚騒動でワイドショーを賑わした後はブラウン管にほとんど登場しなくなった。まあ～、仕方のないところか。

軽臼に降り立つと、時折思い出したようにけたたましいエンジン音を響かせサーチライトの光りが近付いて来ては遠ざかって行く。そしてオオナゴの情報を流し合っているのであらうか、スピーカーの大音響が私の立つ岩を小刻みに揺らしている。

私が釣ろうとしているアブラコやカジカへの影響はないのであらうかチト心配である。海岸から1 km 程のところまで漁をしているのだが、光りに集まったオオナゴを食べに沖に出てしまっているのではないであらうか。光で集めているところをみると集めきれないオオナゴが海岸の近くまで寄って来ており、他の魚も寄って来ていることも考えられる。しかし、オオナゴの生き餅でおなかいっぱい状態で私が用意した草臥れたエサには見向きもしないのではなからうか。

アタリはない

前は真新しい電池であったにもかかわらず光が弱かったので今回はヘッドライトを2個用意して行った。単1の電池を利用したヘッドライトは電池入れをベルトに付けたりポケットに忍ばせたりするためコードが邪魔であり単3のものを頭につけた。夜明けが早いので差し支えないだろう。しかし、軽臼平盤にはいたるところ円釜があるということなので慎重にならざるを得ない。一方所だけ股下ぐらいのところを渡ることになったが全く問題はない。明るくなってから眺めてみると心配すほどの円釜はなかった。一緒に降りた阿部氏は、胴付き長靴の中間から海水が侵入したらしく朝まで気持ち悪いグチョグチョ感と戦ったようだ。

まずは一投目を天秤イカゴロ仕掛けで手前にドボンと打ち込む。2投目、3投目も同じように近くの溝や磯際に打ち込み、磯回りのカジカを狙う。しかし、アタリはない。40 m程先の隠れ根回りにも打ち込むがやはりアタリはない。少しずつ中投から遠投と投げ分けて行くも同じように海からの快い便りはない。私の左側で竿を出して入る前野氏や阿部氏の状況も同じ様である。お互いにぼやきが多くなってきた。

ホッケに続いて

波がべた凧であるので、竿を直角に立て僅かなアタリも見逃さないようにする。竿尻が跳ね上がった。跳ね上がるというよりは直角に立てた竿尻が魚のアタリで岩の上をずれたと言った方が正確であらう。バタバタと竿を揺らしているのを見るとホッケであらう。案の定30 cmにも満たないホッケが上がってきた。ゴロや撒き餌の臭いが効いてきたのかホッケが次々と上がり嫉める。

カジカが来た。25 cm程はあらうかと思われるが腹の全くない頭だけのカジカであった。コチの大きくしたもののようである。これが嫁さんとなるようでは情けないが、枯れても痩せても初めての嫁である。早く離縁してグラマラスな新妻をもらいたいものと思いながらも、ていねいにフラシに入れておく。

ホッケとは違うアタリが来た。クンクン、クンクンと来たところで少し休み、グングン

と来る。30cm程のクロガシラが上がった。白っぽい魚体に黒い斑点がほとんど無く真子蝶ではないかと考えるが、真子蝶を釣ったことがないので定かではない。コースガイドの釣り物にカレイとはなかったのが意外であった。身長にはまだ不満があるが先程の嫁よりも若干ましな新妻が来たので入れ替える。しかも、この新妻は我が女房殿が黙っていても唯一調理してしまう代物である。続けてまたクロガシラである。先程より小さなものではあったがクロガシラは蝶の中でも海底目指してつき刺さるので引き味がよい。ホッケはバタバタするだけで、泳ぐ力が弱い気がする。あの細く小さい尾鰭では仕方がないのであろう。

明け方、遠投していた竿に35cm程のアブラコが来た。これで3度目の新妻になる。最近のミスユニバースは175cmが平均身長というから、更にグラマラスな4度目の新妻を迎えたいものだ。

沖に見える大きな岩の向こう側に根がかり覚悟で打ち込む。岩の回りには必ず大きなアブラコがついていると思い、根がかり対策に一本針にステンレス線のついた鉛で何度も打ち返すがコトリともなかった。右に見える横溝に打ち込む。ホッケとアブラコがダブルで上がって来た。

保護色と実験

足元にある大きなエンカマに黒々としたホッケが見える。ガヤなどは保護色のため、釣り上げて水たまりに入れておくと見る見る体色に変化し、岩の色と同化してどこにいるのか分からなくなるものなのに、ホッケが黒々としているのはどうしたことか。岩は白っぽいものなのに、いつから迷い込んでいたものなのだろう。

遊び心で仕掛けを入れてみる。揺ら揺らと落ちて行ったエサをすぐさま唾え込む。もうしばらくホッケの習性を観察してみたかったのにあっさりと針がかりしたので拍子抜けする。エンカマにしばらく生活しておりエサにありついていなかったためなのか。おもしろくなり、もう一度円釜に放してみる。先程と同じサンマのエサを落とすと今度はしばらく様子を伺っているようではある。少しは学習したのか？しかしエサを踊らせるようにしてみると食いつきはしなかったが如何にも食いついてみたいような反応をしてくる。エサをイソメに変えて仕掛けを落としてみた。すぐさまガブッと来た。いやいやホッケは全く知能というものが無いのか。さらに放して同じことを繰り返してみる。さすがに反応はなくじっとしているが、それは警戒心からくるものではなく2度も釣り上げられ疲れてしまったという感じである。

先程釣ったアブラコをフラシから取り出し同じ円釜に放してみる。20分ぐらい経った頃、アブラコはどこにいるのか分からない程、体色が岩の色に同化したが、ホッケの方は黒々としたままだった。先程と同じようにサンマのエサを落としてみた。アブラコもホッケもエサに近寄ってくる。しかし、アブラコよりも素早くホッケが食らいついた。これにはさすがに驚いたが、続けざまにアブラコも釣れてしまったのには合点がいかない。いつ

もあれだけ苦労し、やっとの思いで釣り上げているのにである。しかし、この実験ともいえる遊びは多くのことを示唆してくれた。

円釜で遊んでいる内に締め切り時間が近づいて来た。前野氏や阿部氏が片付け始めた。まだまだ実験は続けたいところではあるが、大会ではなく個人で来たときにやってみることにしよう。初めに入った場所ではあまり芳しくなかった前野氏は、移動していった場所で45cm弱のアブラコを引き抜いた。入釣する時に「今日はハチガラを釣る」と言っていた阿部氏は宣言どおり2尾をものにしている。

審査の結果

審査の結果私は958（ホッケ 375 mm+アブラコ 357 mm+重量 2260g）点で8位入賞となる。優勝は1213（アブラコ 447 mm+カジカ 371 mm+3950g）点の嵐氏。準優勝は1074（カジカ 375 mm+カレイ 366 mm+3330g）点の大前氏。第3位は1027（ホッケ 401 mm+アブラコ 368 mm+2580g）点の安曾氏。身長優勝は44.3cmのアブラコを釣り上げた荻野氏であった。

今回の昼食は会で準備したジンギスカンである。海岸ぶちの草原に広げたテントの上で酒を酌み交わし釣り談義に花が咲いた。両手を縛ってから聞けという釣り人の歓談が酒の勢いもありいつまでも続いた。私とてほろほろと酔い潰れるほどに両手の間隔は広がっていったに違いない。帰りのバスの中ではその両手の間隔はどの大物が竿を伸している夢を見ながら帰途についた。